

平成20年 6月3日	農作物病虫害発生予報 6月	山口県病虫害防除所 山口県農林総合技術センター
---------------	--------------------------------	----------------------------

～ 目 次 ～

予報の概要	1
予報	
【主要病虫害】	2
【その他の病虫害】	5
参考(予報の見方、気象予報、6月のテレホンサービスの内容)	6

予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イネ	いもち病(葉いもち)	やや多	-	前年並
カンキツ	かいよう病	平年並	やや少	少
	黒点病	平年並	やや少	少
	ミカンハダニ	やや少	やや少	少
ナシ	黒斑病	平年並	やや少	前年並
果樹全般	カメムシ類	平年並	平年並	少

作物	担当者
普通作	藤村(病害) 中川(虫害)
果 樹	村本(病害) 殿河内(虫害)
野 菜	岡田(病害) 溝部(虫害)

お問い合わせ先	
TEL	(083) 927-4006
FAX	(083) 927-4071

予報

【主要病害虫】

イ ネ

1 いもち病（葉いもち）

(1) 予報内容

予想発生量	防除時期
やや多	発病初期 (平年初発生時期：6月25日)

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の共同育苗施設における聞き取り調査では、苗いもちの発生は29施設中1施設で認められ、前年並みであった(±)。

イ 気象予報では、6月の降水量は多く、日照時間は少ない(+)

(3) 防除対策

< 耕種的防除 >

ア 発病した苗は移植しない。

イ 補植用苗は発生や伝染源となるので、補植が終わり次第早急に処分する。

< 防除判断 >

ア 発病を認めたら直ちに防除する。

イ 6月21日に中山間地域を対象に長期予報を発表する予定である。

< 防除のポイント >

長期持続型箱施用剤は、次の条件では効果が不安定になる場合があるので、これらの薬剤を施用したほ場でも発生予察情報に注意するとともに、ほ場の見回りをを行い、早期発見、早期防除に努める。

(ア) 冷夏長雨等による多発生 (イ) 常習発生ほ場

(ウ) 冷水があたるほ場 (I) 漏水ほ場

(オ) 苗いもちを持ち込んだほ場

カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	やや少	少	6月上旬 6月下旬

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬の越冬病斑調査では、発生ほ場率は22.7% (平年25.0%)、発病葉率は1.7% (平年2.8%) で平年並みであった(±)。

イ 5月下旬の巡回調査では、新葉での発生は認められず（平年発生ほ場率9.1%、発病葉率0.4%）で平年に比べやや少なかった（-）。

ウ 気象予報では6月の気温は高く、降水量は多い（+）。

(3) 防除対策

<防除判断>

発病しやすい品種で開花後の防除を実施していない場合

6月上旬と6月下旬の2回防除を実施する。

発病しやすい品種で既に開花後の防除を実施している場合

6月下旬に防除を実施する。

発病しやすい品種と隣接した園やこれらを混植した園及び幼木園

温州みかんなどの発病しにくい品種でも多発することがあるので発生状況を確認し、発病が認められた場合には早急に防除する。

<防除のポイント>

ア 発病した枝や葉は伝染源となるので、できるだけ除去する。

イ 防風樹や防風ネットを整備し、強風により枝葉や果実に傷が付くのを防ぐ。

ウ コサイドDFやZボルドーなどの無機銅水和剤を散布する場合は、葉害を防ぐため炭酸カルシウム水和剤（クレフノン）200倍を加用する。

エ ICボルドー66Dを使用する場合は、梅雨明け以降の夏季高温時の散布やマシン油乳剤との近接散布を避ける。

オ ミカンハモグリガ（エカキムシ）の被害は本病の発生を助長するので、ミカンハモグリガの防除を徹底する。

2 黒点病

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	やや少	少	1回目 : 6月上旬 2回目以降 : 累積降水量が250mmに達したとき または薬剤散布後1か月を経過したとき

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の巡回調査では、新葉での発生ほ場率は68.2%（平年87.1%）、発病葉率は4.4%（平年18.8%）で平年に比べやや少なかった（-）。

イ 気象予報では6月の気温は高く、降水量は多い（+）。

(3) 防除対策

<防除判断>

予防散布が基本なので、(1)の予報内容に記載された基準に合わせて防除を実施する。

<防除のポイント>

枯れ枝は伝染源となるのでできるだけ除去し、園外に持ち出し処分する。

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	防除の目安を超えたとき 雌成虫の寄生葉率30～40%以上 または雌成虫1葉当たり0.5～1頭以上

(2) 予報の根拠

5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は27.3%(平年42.6%)、寄生葉率は0.9%(平年3.5%)でやや少なかった(-)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 発生量はほ場によって大きく異なり、特に交互結実園の生産樹で多発していることがある。また、気温の上昇に伴い急激に密度が増加することがあるため、定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。

イ 葉裏までムラなくかかるよう十分な薬量を散布する。

ナ シ

1 黒斑病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	やや少	前年並	大袋かけ前～ 大袋かけ後

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は50.0%(平年65.0%)、発病葉率は0.5%(平年1.4%)でやや少なかった(-)。

イ 気象予報では6月の気温は高く、降水量は多い(+)

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 徒長枝の発病が多くなる時期であり、徒長枝の先端まで薬剤がかかるようにていねいに散布する。

イ ポリオキシシン剤の耐性菌が県内全域で、ロブラール剤の耐性菌が一部の地域で発生しているため、年1回程度の使用にとどめる。

果樹全般（モモ、ナシ）

1 カメムシ類（チャバネカメムシ、ツヤカメムシ、クサキカメムシ）

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	園地への飛来を確認した時

現況は予察灯調査による

(2) 予報の根拠

予察灯(県内5か所、5月1半旬～5月5半旬合計)における誘殺数は、37頭(平年40.5頭)で平年並みであった(±)。

(3) 防除対策

< 耕種的防除 >

例年被害が発生する園では、ネット(網目4mm以下)で園全体を覆い侵入を防ぐ。

< 防除判断 >

被害を受けることの多い園では、園内の発生状況や周辺の灯火を観察し、飛来がある場合は防除する。

< 防除のポイント >

カメムシ類に対する飛来時以外の薬剤散布は効果がないだけでなく、ハダニやカイガラムシの増殖を招く場合があるため、スケジュール散布はしない。

【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年(%)	平年(%)	
イネ	イネミズゾウムシ	平年並	平年並(予察灯)	少	-	-	成虫密度が100株当たり50頭未満であれば防除は必要ない。
	ニカメイガ	平年並	平年並(予察灯)	前年並	-	-	-
カンキツ	そうか病	やや少	少	少	0	16.9	り病葉は見つけしだい除去する。
ナシ	赤星病	やや多	やや多	前年並	30.0	18.0	一部のほ場で多発生
	黒星病	平年並	平年並	前年並	0	0	

参考

1 予報の見方

(1) 病害虫発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

（注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	前年の評価より少ない発生
前年並	前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報（5月30日福岡管区气象台発表）

予報	低い(%) 少ない	平年並(%)	高い(%) 多い
気温	30	30	40
降水量	30	30	40
日照時間	40	30	30

週ごとの気温傾向

予報	低い(%)	平年並(%)	高い(%)
1週目	70	20	10
2週目	10	30	60
3～4週目	30	30	40

3 6月のテレホンサービスの内容（予定）TEL(083)927-4649

時期	内容
上旬	6月の発生予報、イネいもち病の防除、ダイズの種子消毒、カンキツ病害虫の発生状況と防除、ナシ黒斑病の発生状況と防除、イチゴ炭疽病の防除
中旬	イネいもち病の防除、果樹類病害虫の防除、侵入警戒病害虫
下旬	イネの葉いもちの長期予報、イネのウンカ類の防除、侵入警戒病害虫